

【内田三重大学学長】

皆さんこんにちは。今日のシンポジウムにたくさんの皆さんにお集まりいただいたことをうれしく思っております。皆さんの顔を拝見させていただくと私とよく似た世代の方もたくさんいらっしゃいます。その世代の方からすると、里山とか里海というのは、けっして違和感を持っていらっしゃらない、言葉としては違和感があるかもわかりませんが、その状況については共通理解をいただいているのだと私は思っております。



私は生まれたところが人口 3000 人くらいの小さな村でした。住んでいるところのすぐ近くが山で、普通の生活が自然の中で営まれていた環境でありましたし、私と似た世代の方も、それが当たり前だったというふうに理解しております。ただ、戦後、便利さが豊かさであるという感覚、コンセプトで、この世が、大きい日本という国が、どんどん発展してきた中で、便利さが必ずしも豊かさとは結びつかないということを、もう一度皆さんに考え直していただく機会じゃないかなと思っております。

確かに、便利であるというのは大事なことですけれども、「便利さが自分が生きていく中で一番大切か？」と言われて考え直してみると、必ずしもそうではないなというところに行き着くのではないかと思います。

私が学長になる前までは医者として医療に携わっておりました。私の父親が元気だった 20 年くらい前ですかね、田舎に帰ると、父親と一緒に問診に行くことになりました。車で 30 分行って、それからさらに 30 分歩いた山の上の家で患者さんが寝ていました。その患者さんは本当に不幸かと言われると、私はそうは思わなかった。その患者さんが寝ている部屋の障子を開けると、本当にすばらしい景色が目の前に広がっている。下の方には川と村落が見える、そういう景色の中で病に立ち向かうというシチュエーション。私らが呼ばれて行くのに 1 時間かかるわけだから便利ではないですが、その人が不幸とは私はその時思わなかったし、患者さんも決して不幸な顔をしていなかったと思っています。そういう幸せもある。

里山、里海 これは我々世代の生活の中では、きわめて当たり前のことであるという考えです。これから、皆さんが地域をどういうふうに過ごしていくかということを考える際に、我々が持つてくるこうした感覚を、今日来ている若い人に是非伝えていければと思っております。これがこのシンポジウムの役割であると思っておりますので、最後にフロアとの意見交換の時に、若い人からの意見も聞きながら、いい交流ができるということを祈念して私の開会の挨拶に代えさせていただきます。今日は本当にたくさんの人にお集まりいただき、ありがとうございました。